【特別論考】

アルピニズム
― 日本における変遷と今 ―

和　田　城　志（サンナビキ同人）

はじめに

アルピニズムについて書くためには、まずアルピニズムについて定義をする必要がある。現在使われているアルピニズムという言葉は冒険（遊びやスポーツ）としての側面が強いが、本来はヨーロッパ・アルプスにおける探検登山の精神として生まれた。人はなぜ山を登り始めたのか。桑原武夫は、『回想の山山』（一九四四年）の中で講演録「登山の文化史」をあらわし、近代登山が西欧に興った理由を簡明に述べている。宗教登山、軍事目的、資源開拓、などの目的を持たずに、山そのものを対象とした無償の行為としての登山がどのように発生したか、そのバックボーンを考察している。

「近代アルピニズムの起源となり、またその指導精神となったのは、近代自然科学である。恐れられていた山にまず入り込んで、これを開発していったのは科学である。芸術的静観のごときはそのあとにありうるのであって、最初の原動力にはなりえないものである」

とし、その背景の第一に、マルティン・ルターの宗教改革をあげている。悪魔や龍が棲むと信じられ呪われた山アルプスの神秘性を剥ぎ取ったこと、つまり山の守護者である聖母や聖者の崇拝を認めないプロテスタンティズムの合理性が、宗教登山を解消して近代登山が生まれる地盤となったというわけである。これは、のちに述べる和製アルピニズムの展開とは少し違いがある。

「山の神秘性がはぎ取られ、いなはぎ取ろうとするところに―人間が山のあるじたらんとするところに、近代登山が起こったのである。（中略）未知の探求、そして次々と新しいデータ、つまり登山記録が集積してゆくこと、次々と困難な仕事を求めてゆくこと、あくまでも人間に自然の支配の可能性を信じていること、等々みな然りである」

その背景の第二に、市民社会の成立とジャン・ジャック・ルソーの思想をあげている。

「自然に帰れと言う合言葉は色々と誤解された言葉だが、登山の方では大へんな影響力があった。まず形の美の方では、彼の麗筆によって、人は自然ことに未開の自然の美というものを味わいうるようになる。ルソー一人の力ではないが、この頃になって人々は古典美以外にも美があることを知るようになる。（中略）そして精神美の方では、都会の汚れた生活に対して、山間の小さな村などにはいかに清く美しい生活があるかということ、つまり単純生活の美をルソーによって覚ったのである」

こういう美に目覚めるには、教養とともに経済的余裕がいる。危険を伴い利益をもたらさない無償の行為をするためには、社会そのものが危険であったり、単純生活をすることに汲々としていてはとても山に赴くことはできない。西欧に興った産業革命(科学技術の発展)と植民地経営（未開地開拓）は、生活水準の向上と冒険精神の発露という点で相補的であり、近代登山を育んだ重要な下地と言えるだろう。

桑原の論考は戦時中に発表されたものである。明治大正の黎明期の登山家群像に少し遅れて登場した、

京都帝国大学のアルピニズム理解が凝縮されている。私の信奉する冠松次郎には、このような理路整然とした登山論があったようには思えない。彼には二番手の芸術的静観が似合っている。自然科学の目で山の神秘を剥ぎ取るのではなく、山の神秘の再発見をしようとしているように見える。前人未踏を目指しながら、初登山の価値を大きく宣伝している風ではない。まったくルソーの「自然に帰れ」を地でいっているようなところがある。帝都の商家に生まれたインテリの市民生活がにじみ出ている。

「大自然に親しみ、その神秘と雄大とに驚異し、繊細と柔軟に味到して、自己の満足を得ればそれで足りるので、（中略）東洋風の考えを持ってゐる私は、山を征服するのではなくして、自分の胸襟をくつろげて、大自然と抱擁するのである。ネイルド・ブーツで岩角を叩き、火花を散らして喜ぶよりも、草鞋で岩面に親しんで行く、その柔らかみが欲しいのである。自分が自分を超越して、大自然と不可分の境地に立つとき、それを私は第一等のことと思っている。そこに自我の光榮も高譽もあるので、自然美に接してエクスタシーの絶頂に達したとき、その時こそ私は生きがいのあるものだと信じている。出來れば私は、どうか自然を相手にして進みたい。人を相手にしてあくせくしながら山へ登るのであるならば、登山は寧ろ苦痛ではないか」（「私の登山する氣持ち」『劔岳』一九二九年）

冠の登山に対する考えは、後世の人に多くの示唆を与えているように思う。桑原武夫や今西錦司の山の世界と手触りが違う。山がすんなりと心に添い、親近感を感じる。

というのも、私が経験してきた登山は、正統派アルピニズムの先導によるもので、スタートはヘルマン・ブールの『八千メートルの上と下』、モーリス・エルゾーグの『処女峰アンナプルナ』から始まった。次に大学山岳部特有のパイオニア・ワーク論に振り回され、ヒマラヤの未踏峰を漁った。アルプス三大北壁に代表されるヨーロッパ・アルプスにも憧れた。そして、そのための活動として日本の低山側岩壁のロッククライミングや冬山登山があった。だから、日本のアルピニズムの変遷を語るには、少し歴史勉強をする必要があった。西欧文化のフィルターを通さない黎明期の登山家の自然観の理解が欠かせない。日本独自のアルピニズムがあるのかどうか。確信を持ったのは、雪黒部冬劔の登山に足しげく通って、日本の風土に目覚めてからだった。答えを前もって言っておこう。日本におけるアルピニズムの変遷は登山風土論に帰結すると。

その中に、グローバルな価値観でとらえきれない、登山のありようを見つめたいと思う。自分の登山遍歴を振り返るとき、ある種の劣等感と展望できない未来が立ち現れてくる。過ぎ去った時代への郷愁だろうか。自己肯定をするという意味で、私は思弁的な今西よりも感性的な冠に登山の神髄を見た気がしたのである。

山のこころ

山　変幻自在の造形のうちに
数えきれない物語を浮遊させる
いつわりなき悠久の地平よ
静寂無窮の香りにつつまれて
透明なときを見つめている
風雪は叫び　岩壁は凍てつき
山を感じる　そのこころのまどろむところに
聴いて　ゆだねて　触れて　思う
ああ　孤高の化身よ
私を理解の門のまえに立たせ
ためらう旅立ちに　無垢なる道を指し示す
それはすべてをおおい　やがて私を部分にする

そうして　夢遊病者の一歩を踏み出させる

以上のことを踏まえて、日本に根付いた近代アルピニズムの変遷を考えてみようと思う。実はすでに、私はこのテーマで小文をしたためたことがある。黒部の衆編著の『黒部別山―積雪期』（二〇〇五年）の中で、総説―何故、黒部別山積雪期なのか―である。以下、重複を恐れず書き直すことにする。まず、日本の登山史を限定的に俯瞰し、黎明期から戦後の登山大衆化までを記す。そして、その後のヒマラヤ登山とスポーツクライミングについてコメントする。最後に風土としての登山を結論付ける。

Ⅰ、和製アルピニズムの発生

１、伏流する欧化コンプレックス

日本で探検的登山を始めたのは、小島烏水ら日本山岳会創立期の人々であり、彼らに大きな影響を与えたのが志賀重昂の著した『日本風景論』（一八九四年）である。この本は地理学、地誌の本で、漢籍、古典の素養豊かな美文で書かれた日本風土礼賛の本である。その付録として書かれた「登山の氣風興作すべし」はわが国の山岳探勝の道を拓いた。

国粋保存の文脈で書かれたこの本は、郷土洵美を鼓舞するあまり、異郷の地をおとしめる文言もあり、扇動的でうなずけない部分も多いが、万葉の時代から江戸にかけての文人墨客が伝える風景とは一線を画した表現をしていて、まさに文明開化を体現した著作と言えよう。つまり、西欧科学の視線で日本の風景を分析紹介していると言っていいだろう。そこに日本の近代登山のコンプレックスの源がひそんでいると思う。近代化が富国強兵の欧化を意味するなら、国粋主義を標榜する志賀にしても、その方法論はまさに和魂洋才でしかありえなかったのだ。彼の紹介した日本の風景は、気候風土地理地学と広範にわたり、なかんずく、山岳地に対する関心は高く、その美観を讃える文章は、今読んでも胸躍らせるものがある。明治の人々はこの本によって初めて「国土」を意識したのではなかろうか。

「いはんや山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますます登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよますます快楽の度を加倍す。これ要するに、山は自然界の最も興味ある者、最も剛健なる者、最も高潔なる者、最も神聖なる者、登山の氣風興作せざるべからず、大いに興作せざるべからず」

志賀の国粋主義的日本風景賛美に対して、同じ札幌農学校の先輩である内村鑑三は『六合雑誌』（一八九七年）の中で、少々皮肉じみた批判を書いている。

「日本は美なり、園芸的に美なり。然れども吾人にして他州に譲る所をあらしめよ、アヲスタよりモンテローザを見るの像、ダージンルンよりエベレスト山（カンチェンジュンガの誤り）を望むの観、即ち偉大なる美、これ日本風景の欠乏ならずや、我が国の風景は人を酔わしむるものなり、人を高むるの美、即ち自己以上に昇らしむるの美は、吾人はこれを万国に求めざるべからず」

これは世界の山岳風景と日本のそれを比較して、国粋的に日本を賛美する志賀をたしなめているように読める。今なら素直に言って、ナンガ・パルバットと剱岳を比較しているようなもので、内村の言うことはもっともである。アルピニズムという言葉の背景には、この山岳風土の如何ともしがたい格差が横たわっている。

登山の発達史は、西欧も日本もさほど違いはないように思える。つまり、宗教登山（悪魔の住処か精霊のよりしろかの違いはあるが）に始まり、軍事戦略上のルート開拓、資源の探査（地理、地質）を経

て、科学的興味と自然風土に対する美意識、そして、それらを育てた未知なるものへの憧れとしての趣味的登山である。日本の近代登山とは、近世的素養の上に花開いた西欧式フロンティア登山である、と言っていいだろう。しかし、これは矛盾である。花鳥風月を愛でる漂泊放浪的山旅と自然をねじ伏せる開拓者精神の未踏峰征服とは本来なじまない。

烏水は「近年ひんぴん増加する内地登山の企画の如きは、維新前、道客輩のいわゆる“お山詣で”なる迷信的奮発に出でたるにあらずして、ある意味において探検の気分のようやく助長せられたる結果と推測するを至当とする」と論じる（「本年の登山」『文庫』第二十八巻一号、山崎安治『日本登山史』より）

この探検の気分が、ウェストンの著作の影響であることは周知のとおりである。桑原武夫の言う、西欧登山思想の注入、明治期登山の外発論である。とは言え、日本の探検登山期は明治後期から昭和初期の二十有余年間に過ぎず、西欧登山史との比較にはならない。その上、対象となる山岳が昔より登られているのであれば、日本の山岳が、彼らにとって未知で手付かずの自然であったとしても、西欧式フロンティア精神の充足を求めるのに役不足であるのは否めない。田口二郎は「明治の登山の特性」（『東西登山史考』（一九九五年）の中で、烏水らの探検登山に対する情動を分析する。

「ＪＡＣ（日本山岳会のこと）の集会で、日本アルプスの幻灯写真のあと、アルプスの写真も紹介される。日本の山とアルプス、似てはいるが大変ちがう。皆、山が好きだから山を見る目を持っている。それだけに二つの対比は見る者の心に深い緊張を呼ばずにはおかなかった。日本の近代登山が早々から深いアルプス渇仰を持ったのは、この緊張に由来する。アルプスだけを知る者はこの緊張を知らない」

緊張という言葉を使う田口の意図が痛いほど分る。緊張は羨望と劣等感を基調としていても、ただそれだけではない。日本の風土に対する愛着と近世的感受性への自負が、異郷の風土文化に感応しているのだ。舶来の圧倒的先進文明に呑みこまれようとする中で、アイデンティティを自覚的に見つめている。そこに日本の近代登山受容の深みがある。

私は、山岳という自然のなかに、明確に祖国を感じる。自然遺産であるとともに文化遺産でもあるのだ。政治制度や伝統や民族を超えて、この日本列島の風土に祖国を感じる。それは、国民国家という枠組みでとらえる祖国ではなく、もっと小さい郷（くに）に近いイメージだ。山に登るという行為は、風土という文化との対話なのである。

それを直截的に感じ、風土を礼賛して山に没頭した登山を静観的登山という。彼らは西欧アルピニズムの回路を経ずして登山の快楽を知った。まさに風土論的登山の開眼と言っていいだろう。代表的な田部重治の言葉を聞こう。

「私は或る時間の間は殆ど冒險的のみに働いて、その爲にのみ存する旅の意義を認めた。そしてそれは多くは自然に對する温かみや鑑賞から離れて、ただ珍奇をのみを求めるものであったことを今に認めずにはゐられない。眞に自然と親しみそれと融和するのではなく、ただそれが與ふる危險に拮抗するやうな氣持ち、それと闘ふような心持が旅においてもあらはれたのである。（中略）山に登る欲求は山全體に對する趣味、すなはち溪谷、幽林すべてに對する鑑賞から來てゐるのではなく、絶頂を極めることに存してゐた。しかし今の私は山のすべてに對する親しみを持たんとしてゐる。一径一草にも伝ひしらぬ親しみをもつやうになって來つつある」（『山と溪谷』一九二九年、「山に入る心」）

確かにこれは、青春時代の激しい登攀欲（動的登山―西欧アルピニズム）から壮年期の成熟した山旅

（静観的登山―和製アルピニズム）への変化を述べたものである。単なる老いにすぎないかもしれない。しかし、この変化が可能なことが重要なのだ。それは全く異なった山岳自然風土を知っていればこそ、深い自然理解（大げさに言えば、人間理解）を生み出すからである。私の登山人生も、彼ら黎明期の登山家と同じ道をたどっているように感じる。

2、アルピニズム―受容と相克の始まり

具体的に最初に海外の山に登攀の対象として挑んだのは槙有恒である。また、彼の薫陶を洗練したかたちで文章に残したのは大島亮吉である。彼らは、小島烏水らのアルプス渇仰と小暮理太郎や田部重治の静観的登山を融合しようとした。槙の一九二一年に初登攀したアイガー・ミッテルギー山稜と翌二二年に慶応大学山岳部が登った、槍ヶ岳、立山、剱岳などの積雪期初登頂は、雪山登山の華々しい幕開けとなった。そして二三年、板倉勝宣らの立山松尾峠の遭難は、アルピニズムに目覚めた槙らに最初の試練を課した。槙は雪山登山の意義を板倉勝宣追悼の文で述べている。内容を要約して書くと、以下のようになる。

「雪と氷の山（アルプス的登山）を味わうためには、どうしても積雪期の山に行かなければならない。先人の跡を辿るのに飽き足らず、少しでも上に伸びたいという望みがあるならば、いつも新しい道の開拓に向うはずだ。山岳美の懐に入って喜悦を見出すことも、艱難に耐える活動も、あるいは悠々たる超脱の心境もあろうが、山岳と天候を相手にしていることなので、危険をともなうのはどうしても避けられない。その危険に対して、能う限り注意を払い、進んで勇気をだすべきである」（『山行』一九二三年「板倉勝宣君の死」）と遭難直後の自分を励ますように総括している。

槙は明確にアルピニズムを意識している。前人未踏に対する開拓者精神、自然探勝にはない上昇志向がある。つまり、他者を意識した冒険心が山に登ることの重要なファクターだと考えているのだ。ある意味、西欧を模倣しているとも言える。しかし、日本の山岳における積雪期初登頂の登山も、探検登山とどうように西欧の登山史と比べると、その活動期間は短く、アルピニズムを熟成するのには役不足だった。とは言え、アイガーの衝撃はそれだけではなく、もう一つの登山スタイルを目覚めさせた。ロッククライミングである。板倉は、探検登山の終焉と次世代の登山を予見して、雑誌『山とスキー』三、四合併号（一九二一年）に「登山法についての希望」と題して、アルピニズムの到来を述べる。

「ここに於いて動的な山の味ひ方、即ちロッククライミングとスノークラフトとが表れて來るべきではなかろうか。（中略）動的な登山方法、其物が一つの創作である。一寸平方位の二つのつまさきと十本の指に、万事を、?しあらゆる、注意をつくして岩をよじぢる時、或いはアックスとクリーパーによって一歩、一歩と頂上へ近づく時そこに云ひ難いものを御互に感ずる。祖時山が如何に、偉大に見えて來る事であらう。今迄何度となく登った山さえ、全く異なった一面を示すに違いない」

大島は、板倉のこの文を読み、登山思想の推移を自分なりに解釈する。

「山に登る誰もが、等しく最初に山に對して抱く思ひは、自然禮賛、山岳崇拝の念であると思ふ。（中略）それに代りて、新たに、山岳征服、或いは山と闘ふと言ふやうな積極的な氣持を我等は抱くやうになる。まこと正しき意味のピークハンターのもつ氣持が即ちこれである。ある高名な登山家（アルバート・F・ママリーのこと）は、この新しき登攀を常に求めつゝあるものゝみがまことの登山家である、

とまで言っている。而して我等がこのやうな氣持を抱きてより、ある時を経て次第に、今度は、山と深く親しみて、静かな思想的な深みを有つ山の味はひ方を求めるやうになり、これが前の山と闘はんとする氣持と深く交はうやうにすゝんでゆく」（「槍の北鎌尾根・付録」『登高行』第四年、一九二三年）

内容はほぼ田部と同じだが、その意味するところは大きな隔たりがある。田部には、西欧文化への憧れはあっても、アルピニズムの衝撃はない。言うなれば、青春期の熱情が壮年期へ熟成する過程だ。未知なるものと自然美への憧れが、山人の素朴と山旅の思索へ止揚していると言っていいだろう。

大島亮吉は複雑だ。アルピニズムの衝撃をアルプス渇仰で満たすだけではなく、日本の風土の中で具現化しようとする。バリエーション主義（ママリズム）に目覚め、谷川岳の岩場にその可能性を見つけ、冬の未登山稜を目指す。そして、大島は冬の前穂高岳で墜死する。先鋭的、戦闘的登攀を目指しながら、静観的登山の思索が見えかくれする。日本アルプスのみならず、北海道、東北、越後の低山渓谷にも分け入る、静と動の振幅の大きい登山家であった。

同じころ、大島に注目し、新しき登攀を模索していた若者がいた。三高の今西錦司である。「俄然アルピニズムとういふものが擡頭した。雪の山、岩の山、初登山は若きアルピニストの合言葉となった。私はためらった。しかし變装せねばならなかつた。草鞋はトリコニーをうつた重々しい靴に、スキー、クランポン。仲間は再び集まった」（「初登山に寄す」『山岳省察』一九四〇年）

何故、変装しなければならなかったのか。この言いぶりに、今西の思いがにじむ。彼らは、源次郎尾根、八ツ峰を登り、チンネにケルンを積んだが、初登攀の感激はえられない。今西の強烈な個性は、アルピニズムを大島とは異なる視点でとらえようとした。アルピニズムの根本思想は「未知を既知に」変える探検に由来するものだ。本邦の山岳は古代から登られていて、元からアルピニズムの対象にはならない、と考えた。アルピニズムを完全に理解しているだけでなく、己の立ち位置もしっかり自覚している。恐るべき知性だ。

「そもそも近代的登山術は、それなくしては登れない山に、それを用いることにより、はじめて登りえたことから発祥したはずのものである。そうとすれば、私たちの身につけた登山技術も、すべからく前人未踏の処女峰に向って試してみるべきであり、その行為の中でこそ、近代登山精神の継承が見られるのでなければならない」（「探検十話」『私の自然観』一九六六年）

一点の矛盾もない正論である。今西の偉大さはそこから始まる。日本になければ世界に求める。それが戦前のＫ２計画であり、戦後のマナスルである。加えて今西の本領は、西欧のコンセプトを自分流に組み替え、新しい枠組みとして構築するところにある。山岳学から自然学への提唱、今西ドクトリン（主体性の進化論）の発生である。もうここには、志賀重昂のような、劣等意識の裏返しとも言える屈折した優越意識はない。今西は率直なのだ。今西は、西欧アルピニズムの剛速球をホームラン性場外ファールに打ち返したと言っていいだろう。

知の巨人、今西の思想は京大山岳部の後輩たちに引き継がれ、ＡＡＣＫ（京都大学学士山岳会）のチョゴリザ（七六五四ｍ）に始まる数多くの初登頂に結実してゆく。他大学の山岳部にも大きな影響を与え、ヒマラヤの未踏峰は彼らの目標となった。しかし、これは色あせていく探検登山という、初登頂主義の袋小路の入り口に立っていたとも言える。偉大過ぎる今西の思想は登山の枠には収まらない。大興安嶺からカラコルムの氷河、アフリカのジャングルへ、

その探検フィールドは広範囲で、生物社会学からサル学へ新たな学問分野を開拓していった。

３、岩壁という白いカンバス

出遅れてきた探検家、今西錦司のスタートはバリエーション・ルートの開拓で始まったと見ることができる。彼らは時代の最先端を走っていた。黒部の人、冠松次郎が彼の黒部探検の終章、剱沢大滝に挑もうとしていた時に、今西青年は剱岳の源次郎尾根やチンネの初登攀をする。探検の残り香に静観的登山を花開かせた冠と黒部の谷に前人未到を求めた今西の対比は、現代の登山にも見ることができる。私で言えば、雪黒部とヒマラヤの未踏峰である。しかし、それら日本アルプスの初登攀に技術的困難さはなく、西欧アルプス風登山技術を求めて登った今西でさえ、幻滅の言葉を残している。

だが、岩壁登攀の技術が重要であることは疑いの余地なく、大正末期には東西ほぼ同時に岩登りのためのゲレンデが拓かれ、技術書が翻訳されている。関西では、藤木九三らによってＲＣＣが創設され、神戸六甲山の岩場が開拓される。関東では、後に冠とともに黒部川、剱沢大滝に華々しい探検登山をする東京帝大の三羽烏、別宮貞俊、岩永信雄、沼井鉄太郎によって三ツ峠の岩場が登られる。静観的登山の象徴である黒部山人の彼らにして、新しき登山を要求されたのである。そのときの装備がおもしろい。年長の別宮はゴム底靴、岩永は草鞋、一番年下の沼井は鋲靴、時代をあらわすいでたちではないか。

明治期の探検的登山である山頂トレースは終わり、未踏破の渓谷遡行と積雪期の初登頂に寄り添うように、無雪期のルートは尾根から岩壁に移行する。大島亮吉は死の八ヶ月前、一九二七年に初めて谷川岳一ノ倉沢を訪れ、岩壁の大伽藍に驚いて、部報にその感動を書き残している。

「主として谷川岳の岩壁の下調べに行きたるなり。總ては尚研究を要すべし。近くてよい山なり」（『登高行Ⅶ』一九二九年、年報欄六一貢）

一ノ倉が探検的対象でないことは明らかで、ゲレンデ的側面を匂わしている。日本において、山岳が必要な技術を育てるという考えと、技術が活かされる山岳を要求するという考えは、静観的登山とアルプス的（動的）登山のそれぞれの特徴に対応する。谷川岳東面の岩場は時代の要請による登場だったと言えるだろう。大島亮吉が生きのびていたら、彼の目指す山に一ノ倉はどのように影響したであろうか。

「動的な登山方法、其物が一つの創作である」の言葉どおりに、空白の岩壁群は若いロッククライマーたちの自己表現の場になった。活躍したのはやはり東京帝大の学生たちだった。小川登喜男を中心として、すばらしい登攀がなされた。一九三〇、三一年に一ノ倉、幽ノ沢の多くのルンゼがトレースされた。一ノ倉沢本谷や岩稜をたどる小川を引き付けたのは屹立する垂直の衝立岩だった。彼のルートを追う目は、これまでの初登頂や岩稜トレースとはニュアンスが少し異なる。槍ヶ岳北鎌尾根や剱岳八ツ峰が一つの独立した彫刻と例えれば、滝谷、衝立岩、屏風岩は白紙のカンバスと言っていいだろう。

山と登攀者を対峙させれば、関心の度合いが、山岳自然そのものより人間のかかわり方、在りように移り始めたと言っていいのではなかろうか。小川に続く東大の精鋭に田口二郎と高木正孝がいる。彼らの山に求める動機は現代のクライマーに共通する。未知未踏を求めながら、岩登りの困難と雪山の危険に身をさらす戦慄を自覚している。山岳自然のパーツに過ぎない岩壁や風雪の中に無限の創作を見出したのだ。ここに来て初めて、西欧アルピニズムの一歩を踏み出したと言えるだろう。実際彼らは青春をアルプスで燃やした。

一九三一年は登山界にとって注目すべきことの多い年だった。この文脈に沿って言えば、アルピニズムの目指す二つの領域、バリエーション・ルート登攀と処女峰初登頂の成果が挙げられた年であったと言える。ヨーロッパでは、難攻不落を誇っていたマッターホルン北壁がシュミット兄弟によって登られる。ヒマラヤでは、イギリスのスマイス隊がカメット（七七五五m）の初登頂に成功する。これは当時人類が到達した最も高い頂上だった。

国内では、前穂高岳屏風岩第一ルンゼが小川登喜男によって初登攀される。ＡＡＣＫ（京都大学学士山岳会）が設立され、ドイツ、バウアー隊のカンチェンジュンガ遠征報告「ヒマラヤに挑戦して」が京大の学生であった伊藤愿によって翻訳される。西堀栄三郎らによって初めて冬富士で極地法登山が行われる。ささやかだが、ヨーロッパの動向に連動している。個人的興味を加えるとすれば、日本電力測量部によって、日本最後の秘境剱沢大滝最下段の滝右岩壁が登られ、初めて大滝内部が人の目に触れられるということになる。

４、戦争の青春

山登りにも時代は反映される。明治は進取気鋭、貪欲な知識吸収の時代であった。大正はモダニズムと伝統が織り成した浪漫にあふれていた。戦前昭和は世界に連動した暗い世層を反映していた。大英帝国のフロンティア精神に陰りが見え、新興勢力ドイツを中心にして、アルプスの未踏岩壁に新ルートの開拓が華々しくて展開された。

「頂上か、しからずんば死か」「我に続くものは死を覚悟せよ」の過激な精神主義が蔓延した。世界経済は逼塞し、イデオロギーは交錯し混乱した。戦争の予感は若者の心にニヒリズムの影を落とした。アルプス三大北壁が、ドイツ、イタリア圏のクライマーによって登られたのは偶然ではないだろう。第二次世界大戦に枢軸国と言われた国の若者の登り方に悲愴感があると考えるのは、予定調和的に歴史を見過ぎることになるのだろうか。

積雪期の一ノ倉をいち早く登った田口二郎と高木正孝は、東京帝国大学を一九三六年に卒業、それぞれヨーロッパに渡る。アイガー、グランドジョラス両北壁登攀競争（ともに一九三八年に初登攀された）の激化しているただ中に飛び込んだのである。どのような感慨でアルピニズムを見ていたのだろうか。田口はイギリス留学後、スイスの日本公使館に現地採用され、第二次戦争勃発とともに朝日新聞社の特派員となる。高木はベルリン大学へ留学、日本大使館の翻訳官として戦中を過ごす。二人は終戦まで約九年間ヨーロッパに滞在する。戦時中にもかかわらず、アルプスを登っていた二人に、世界はそして祖国日本はどのように見えていたのだろう。

一九四五年、敗戦国日本は国を失った。ヨーロッパ在住の邦人は中立国スイスに集まり、帰国の手立てを模索していた。そんな中で、二人が登ったヴェッターホルン北壁は、アルピニストの名に恥じないすばらしい登山だ。国家の行く末を思う若者はどんな気持ちで山に向かっていたのだろう。二人はそれぞれ後に妻となるスイス人女性と付き合っていたのだから、案外コスモポリタン的鷹揚さで、国家を見ていたのかもしれない。彼らは一九四七年、アメリカ経由の船旅で故国に帰還する。高木は新妻を伴っていた。田口の妻も翌年、彼を追いかけるように日本にやってきた。日本は、進駐したアメリカ占領軍の統治する敗戦国であり、独立国ではなかった。そんな何の見通しもない極東の地に、はるばるやってきた二人の女性のたくましさには脱帽する。それだけ高木と田口には、男として魅力があったのだろう。

田口は、一九六二年にパタゴニア遠征の後、南太

平洋マルケサス諸島調査で行方不明となった盟友、高木を追悼する文の中で、高木の、つまりは田口自身の登山観を述べている。

「山登りの本質は、その人がすべてを忘れてその行為に一瞬一瞬打ち込むのが本来の意義であろう。そして高木の場合には、登るという動機と目的以外には、かつて登山を試みることはなかったのではなかろうか。そういう意味で高木は実に完全な登攀者であった」(「高木正孝のこと」『山岳』第五十九年、一九六四年)

彼らの後輩にあたる佐谷健吉は、旧東京商大(一橋大学)の小矢部全助を魂の師匠と慕う根っからのクライマーで、旧制浪速高校時代から過激な登攀をした。一九四一年に繰り上げ卒業して海軍に入隊し、飛行艇のパイロットとなってラバウルに駐屯する。輸送を任務とする飛行艇部隊は、アメリカ空軍戦闘機の格好の餌食になり全滅するが、マラリヤを患った彼はかろうじて生きのびた。

戦争をはさんで行われた彼の二つの積雪期初登攀、四一年の鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁と四八年の鹿島槍ヶ岳北壁は、当時の若者の典型だろう。鬱屈する激しい想いを、ＴＵＳＡＣ(東大スキー山岳部)『部内雑誌』(一九三六〜四〇)に書き残している。

「登山ノ本質ハ何ヨリモ先ズ山ヘノ行為ニアル、山ヘノ行為ハ『孤高ノ心』ト『不屈ノ闘争』ヲ要素トスル。登山ハコノ意味ニ於イテ個人的ナモノニ過ギナイ。極端ニ言エバ『孤独ナル彷徨』デサエアルダロウ。友情ト雖モ『孤高ノ心』ト『不屈ノ闘争』ヲ経過シテ始メテ結バレルモノナノデアル。(中略)我々ノ進ム途ハ、唯一ツ、激シイ登攀ニ身ヲ委ネルコトアルノミデアル」(『山と友―東大山の会五〇年記念』一九八一年)

戦争と山、迫りくる全体主義の軍靴の響きを聞きながら、彼らは孤高の心で山に没入する。そのことにかろうじて精神の自由を保とうとしたのだろうか。そこにはもう静観的登山や探検的登山、アルピニズムの意味を問うことなどの関心はうすれて、ただひたすら肉体の作法に従い、山と対峙するのである。

「今にして思えば、高木にとって登攀は山という外界物と、彼に深く内在するエゴとのたえまない接線であって、これから生じるドラマチックな複雑な経験の起伏が、登山の同伴者の存在とは全くおかまいなしに、さまざまな心理的振幅を、彼の心の世界に呼び起こしていたに相違ない。いや、彼は自分を登山という“場”の実験の具に供して、自分をたえまなく凝視していたのだ」(「高木正孝のこと」『山岳』第五十九年)

この感覚は現代の先鋭的ソロクライマーに通じるものである。時代を超えて人はなぜ、死を賭して山に登るのであろうか。否、山に登ることで、死の戦慄を体現しようと考えているのであろうか。ここにはもう西欧、日本という区別はない。

アルピニズムの精神は若さの中でこそ、その火花は輝く。田口や高木や佐谷が戦中戦後をどのように生き、どのように山に触れてきたか、興味深い。彼らは、戦争という鏡に映る、登山家としての自分の姿をどのように見ていたのだろう。彼らの足跡にそれを捜すしかない。

戦後、高木は神戸大学で心理学の教鞭を取り、田口は実業に転じる。二人は一九五二年のマナスル偵察隊と五三年の第一次登山隊に参加した。その後、彼らが再びザイルを組んだかどうかは知らない。アルプス仕込みのテクニックでマナスル隊をリードした。佐谷は数少ない戦中パイロットの生き残りとして、航空自衛隊の創設に加わり、航空幕僚として後半生を生きた。一九五八年の防衛庁山岳部の創立にもかかわったというから、山への情熱も持ち続けていたのだろう。

登攀者

氷壁の先端から空に腕を伸ばし
風雪の峰で蛮勇を誇る　ロシアン・ルーレット
命をさらす習いは　昔少年の掟
意味を問わないこその興奮に身をゆだねる
すべてを支配する重力よ
すべてを成り立たせる実在のまえで
その力のなんと小気味いいことか
打算なき行為　己に命じるゲームのきまぐれで
いつの日か　登攀者は重力に殉じる
その必死とめまいの中で
ありありと生の歓喜にふるえるのだ
他に何を求めることがあろうか
登攀者は・・・・空を歩くすべを知る

５、国破れて山に問う

岩と雪の山に対する技術は戦争で一時弱体したが、生きのびたクライマーの情熱はかえって激しく燃え上がった。戦前唯一のヒマラヤ登山の成功は、立教大学の堀田弥一が率いた一九三六年のナンダ・コット隊だけだった。戦後復興への遅々たる歩みの中で、大学山岳部はヒマラヤをめざし、積雪期の山に極地法を展開した。それらを批判的にみる社会人山岳会もあらわれてきた。戦前戦後に活躍した徒歩渓流会や昭和山岳会はその代表的な山岳会である。

『風雪のビバーク』（一九五〇年）で一躍名をはせた徒歩渓流会の松濤明は、一九四二年の入営直前まで、北岳バットレス中央稜初登攀など激しく山を登った。四六年の復員後も前にも増して激しく登る。そして四九年の冬、槍ヶ岳北鎌尾根で遭難死する。関西にも猛者がいた。新村正一と梶本徳次郎は四二年三月、積雪期の屏風岩第一ルンゼを初登攀したのち入営する。そして四六年の復員した冬にはもう、いろいろな山岳会の寄せ集めで剱岳、立山で登山を再開している。翌年四七年三月には、剱岳早月尾根から雪洞を利用して槍ヶ岳まで縦走している。物資の乏しい時代にこの長大な登山を成功させた力量は驚きだ。彼らの山に対するあこがれが目に浮かぶ。関西登高会は彼らによって創立された。

東海にもスターがいた。山稜会の伊藤洋平である。四四年に屏風岩正面壁にルートを拓き、四八年にはそのルートの積雪期初登攀を成功させる。四七年には京大医学部にありながら、山岳雑誌『岳人』を創刊する。五二年には冬の知床半島を初めて岬まで縦走する。そして五三年、ＡＡＣＫ初のヒマラヤ遠征アンナプルナⅣ峰に向かう。

一九四五年の太平洋戦争敗戦をはさんで行われたこれらの登山がどれほど真剣で切実であったか、現在では想像できない。五〇年代に入って、朝鮮戦争による軍事特需で急激に発展した経済は復興を後押しした。勤労者にも登山をする余裕ができて、たくさんの社会人山岳会が台頭してきた。雲表倶楽部、鵬翔山岳会、東京白稜会、ベルニナ山岳会、東京雲稜会など六〇年代の岩壁をそうなめにした山岳会などである。社会は裕福とは言わないまでも貧窮ではなくなってきた。山岳会創立の意気込みを梶本徳次郎は、「如何に登るべきか」（『関西登高会抄報』第一号、一九四八年）の中で述べている。

「敗戦直後の混乱と虚脱の中で、再び激しい自我に目覚めた我々は再建の基調を山に求め、より高くより困難を克服してアルピニズムの復興を図ろうとした。かつての我が国登山界の主流は学生と有閑人であり、世間は登山を有閑階級の遊戯と見做してきた。しかし若干の先輩は貧しい勤労生活の中からアルペンの岩と雪に挑み、自由の天地に新しい足跡を残してきた」

と社会人山岳会の意義を述べながら、市民生活の困窮、家庭への責任、仕事との葛藤を吐露する。そ

して最後に、登山の民主化と解放を謳い、働きつつ登るが故に登山はいっそう輝きを増すであろう、と締めくくっている。(『関西登高会四〇年史』一九八七年より)

一九五六年の日本山岳会マナスル初登頂は戦前大学山岳部エリートの金字塔と言えるだろう。ＡＡＣＫは戦後も先頭に躍り出る。いち早くヒマラヤ遠征計画を立ち上げた。西堀栄三郎にマナスルを薦めたのは、戦前に新聞記者としてロンドン駐在の経験のあった藤木九三だと言われている。今西錦司は、ヒマラヤ研究の第一人者であった小暮理太郎に、マナスルについて教えを乞うている。西堀は一九五〇年開国すぐのネパールに赴き、交渉を始める。五二年には今西錦司を隊長に、田口二郎、高木正孝を伴って、マナスルの偵察隊が派遣される。戦争で中断されていた今西流パイオニア・ワークの実現である。しかし、社会人山岳会にとってヒマラヤは高嶺の華だった。勤労青年の登山が週末のロッククライミングに象徴されるのは当然の成り行きだった。谷川岳一ノ倉はその格好の舞台となり、網の目のようなルートが拓かれ、おびただしい遭難者を出した。

六〇年代、日本の登山志向が分化しはじめる。誤解を恐れず簡単に言うと、ヒマラヤを目指す大学山岳部の冬山長期縦走とアルプスを目指す社会人山岳会の岩壁登攀である。大学山岳部は伝統に寄りかかり保守的になってゆく一方で、社会人山岳会は新な自己実現の場を模索していた。戦前から拓かれていた、剱岳チンネ、前穂高岳東壁、滝谷、北岳バットレスのようなアルペン風岩壁にはもう新ルートは見いだせず、未踏の低山側岩壁を物色した。前穂高岳屏風岩、黒部丸山東壁、黒部奥鐘山西壁、唐沢岳幕岩、笠ヶ岳錫杖岩などに多くのルートが拓かれた。一九五九年、東京雲稜会南博人らによって拓かれた屏風岩東壁や一ノ倉沢衝立岩正面壁は、埋め込みボルトを駆使した画期的な初登攀だった。

社会は高度成長時代に突入し、もはや戦後ではなくなっていた。集団就職、新設される大学の理科系学科、団塊世代の若者は工業地帯の集中する都市部へ流れ、登山人口を支えて、空前の登山ブームを巻き起こした。エリートから大衆へ、思索から情緒へ、精神的充足から肉体的躍動へ、登山の表現形は大きく変わっていった。

Ⅱ、ヒマラヤ登山とスポーツアルピニズム

１、探検登山の終焉

日本の山岳フィールドは西欧アルプスのそれとはまったく違う。近代化も過去の出来事となり、価値観やライフスタイルの中にグローバルな世界標準が浸透してきて、今更アルピニズムの出自を問うことなんてナンセンスなようにも思える。改めて和製アルピニズムなどという言葉は不要かもしれない。実際、現実のクライミング事情を見るに、ここまで書いてきたことはもう何も関係ないように思える。それらは過ぎ去った歴史の断片であって、未来につながるようにも思えないからである。しかし、どこかで無意識に影響を受けているかもしれないとも思う。と言うのも、それらは私個人の登山志向に反映されていると感じるからである。

アルピニズムは、初登頂主義からバリエーション主義に進化した。探検から冒険に変わったと言ってもいいだろう。探検は地理的探検から学術探検へ、冒険は地理的冒険からスポーツ的冒険へ移行していく。探検登山とは初登頂主義の登山のことであるが、地理的探検だけではなく冒険の要素も最初から含まれていた。つまり登山には、水平軸と垂直軸の両方の要素を持っているからだ。アルピニズムの呪文「よ

り高き、より困難」に「より遠き」を加えて、初登頂を演出してきた。この三つの要素をすべて持っている山が最高の目標ではあるが、その優先順位は高さ、難しさ、遠さであることは歴史の示すとおりである。そして、未踏峰がなくなると初登頂主義は終焉を迎える。

西欧の登山に大幅に遅れて、日本もヒマラヤを目指した。一九五〇，六〇年代を主導したのはマナスルに代表される、老舗大学山岳会のエリートたちだった。特に、ＡＡＣＫの活躍はすばらしく、多くの大学山岳会が後に続いた。その理念はパイオニア・ワークを標榜する初登頂主義だ。そして、実際多くの初登頂をものにした。しかし、めぼしい山塊の主峰のほとんどは西欧の登山隊に登られてしまっていた。それは、登山の歴史から言っても、経済、文化の先進性から言っても当然のことだった。

それに加え、西欧と日本には大きな違いがあった。それはアルピニズムの解釈の違いだ。組織と個人の問題と言い換えてもいいかもしれない。国威発揚的な側面もあった八千m峰登山では、西欧においても組織優先的であったが（そうでない隊もあるが)、それ以外の山では、ほとんどの西欧の登山隊は少人数で、個人的な登山隊が多かったように思う。半面、日本隊は組織を背負っていたような感じがする。

初登頂主義からバリエーション主義にかじを切ったのも西欧が早かった。一九五一年、まだ八千m峰はアンナプルナしか登られていない未踏峰だらけの時代に、早くもＲ・デュプラ（フランス）はナンダ・デビィの縦走を企てた。先駆的なバリエーション・ルートの試みだった。めぼしい未踏峰が登られてしまった一九七〇年代に、西欧は一斉に八千m峰のバリエーション・ルートに向かった。日本隊は残された処女峰をどん欲に漁り、はなばなしい成果を上げた。ほとんど間髪を入れずに、少人数のアルパインスタイルが登場した。これはアルピニズムの当然の帰結だった。ここでも日本は出遅れた。アルプスで培われたクライミング技術は、昔も今も西欧の登山家が優れていた。

初登頂主義に固執した大学山岳部の殻を破ったのは、アルプス三大北壁を目指した社会人山岳会のクライマーで、彼らは本場のアルピニズムを体感してきたつわものたちだった。私は、日本のヒマラヤ登山の歴史において、一九七六年をエポックメイキングな年だと感じている。日本隊によるすばらしい初登攀がなされた。日本山岳会隊のナンダ・デビィ縦走は世界の登山家の憧れだった。山学同志会隊のジャヌー北壁、戸田直樹隊のチャンガバン南西稜、それぞれ時代を先取った先鋭的な登り方をした。時を同じくしてたくさんの初登頂があった。学習院大学のスキャンカンリ、神戸大学のシェルピカンリ、大阪大学のアプサラサス、東北大学のシンギカンリなどカラコルムの七千m峰がいっせいに登られた。もう、初登頂は珍しいものではなくなった。登山界の関心は、初登頂よりは明らかに前者の三隊にあったが、たった一年のあいだにこれだけの成果を上げたのだからすばらしい。それも明快に、初登頂主義とバリエーション主義がタイアップしている。

初登頂のすばらしさが失われることはないし、魅力的な未踏峰がないわけでもない。しかし、じり貧になるのは目に見えているし、ただ登られていないというだけではもう山としての魅力があるとは言えない時代になった。アルピニズムの関心は明らかにバリエーション主義にシフトした。

本来初登頂主義は、人類が登りえない山に登ることが目的だった。それは、地理的探検（未知未開の地)、険しい高所の困難ゆえに到達し難かった頂を意味していた。加えて科学の発展は、未踏峰のもう一つの魅力「より遠き」―地図の空白部―を奪った。

グーグルアースで山の位置、姿が正確にとらえられる時代に、地図の空白部があろうはずはない。否、これらができる前から交通網の発達と情報の氾濫は、未知なるフィールドを消し去っていた。

初登頂主義は、いつの間にかアルピニズムの精神が伴わない理念的なものになった。先鋭的な登山家たちはそのことに敏感に反応した。初登頂のみに価値を見出さず、初登頂を手に入れるやり方にこだわることによって、残り少ない未踏峰をより美しく飾ろうとしたのである。そこにアルピニズムの真価が感じられる。初登頂の成果が許可取得の交渉力で決まるような登山には魅力が感じられない。登ってしまえば勝ちというものではもうなくなった。如何に登るか、それが大切なのだ。

2、バリエーション主義への回帰

初登頂主義とバリエーション主義の考え方の間には明らかに断絶があるのだが、西欧のアルピニストはこれを融合した。数少ない未踏の玉峰はそのように登られた。バインターブラック、クングールⅡ、ガウリシャンカール、メンルンツェなど、その山塊を代表する未踏峰たちは、少人数のアルパインスタイルで初登頂された。それとは対照的に、一九七〇年から八〇年にかけて、もっともたくさんの初登頂をものにしたのは、多分日本隊だろう。しかし残念なことに、これらの初登頂は旧態然としたタクティクスで登られたものがほとんどで、正直、魅力に欠ける登り方だったと言わざるを得ない。私もそのただ中にいた一人だった。

私が二つの七千m未踏峰、ゲントⅡ（七三四三m）とランタン・リルン（七二四六m）を初登頂した一九七八年の同じ年に、ライホルト・メッスナーはナンガ・パルバット、ディアミール壁新ルートを無酸素単独初登攀し、人類で初めてエベレスト無酸素登頂を成し遂げた。私は激しいショックを受けた。そう難しくもない七千m峰を多人数の極地法で登っている横で、難しい八千m峰の新ルートをたった一人で登ってしまう、この落差に打ちのめされた。地球上にはもう登り難い未踏峰など存在しないと思った。メッスナーなら、残されたすべての未踏峰を単独で初登頂することができるだろうと思った。初登頂主義の根幹が崩れ去ったように感じた。

バリエーション主義の初期のターゲットは、ナンガ・パルバットルパール壁、アンナプルナ南壁、エベレスト南西壁、マカルー西稜に代表される巨峰の岩壁極地法だったが、それらはすぐにアルパインスタイルに取って代わられた。装備、技術、タクティクスが洗練され、アルピニズム本来の姿、少人数による速攻登山に還っていった。ヒマラヤとアルプスがつながったのだ。ヒマラヤという高高度の特殊な山を登るという、ヒマラヤイズムが消滅したことを意味した。まさにアルプスを登るスタイルで、ヒマラヤの高峰を登る時代になった。

バリエーション主義（ママリズム）はA・ママリーによって一八八〇年頃提唱された。アルプス初登頂時代の黄金期は、モンブランの初登頂（一七八六年）からマッターホルンの初登頂（一八六五年）の間を指す。これ以後、より難しいルートや冬季の挑戦が始まる。ママリーがマッターホルンをツムット稜から登ったのは一八七九年だから、彼はこの登山の価値を誇示したかったのかもしれない。新しいアルピニズムの門が開いたと言っていいだろう。ツムット稜登攀は、アルプス登山の最初のバリエーション・ルートと言えるかもしれない。彼は、さらに激しいバリエーションを求めて、カフカズ、ヒマラヤを目指した。そして一八九五年、ナンガ・パルバットで行方不明となった。まさにアルピニズムの神髄、「より高き、より困難な、より遠き」山に向かうことを

実践したのである。

初登頂主義が地理的束縛を受けるのと違って、バリエーション主義には無限の創作の余地がある。今まで「初登頂」という言葉が過剰に評価されすぎてきた。アルピニズムにおける「初」はもともと地理的探検だけの専売特許ではなかった。最初に述べた「目的を持たない無償の行為」であり、「山の神秘性をはぎ取る」ことであり、「自然美の発見」であった近代登山そのものが「初」を内在していた。ママリズムは、初登頂された後に、仕方なく選んだ登り方を提唱しているのではない。初登頂主義を飲み込んだ登山の本質を示していたのである。

振り返って、我が国のバリエーション主義はどうかと考えてみると、日本には初登頂の黄金時代というものはない。最後の未踏峰と思われていた剱岳さえ、すでに平安時代に登られていた。当時の文人たちはとうに承知していたはずだ。黒部奥山廻りのように藩の監視が行き届いていたし、修験道の修行僧も出入りしていた。何よりも杣人、猟師、山師など、山人の生活の場であったのだから、前人未踏と信じる方がおかしい。記録はないが、だれかきっと登っていただろうと考えていたに違いない。だから真の意味で、初登頂の黄金時代はない。最初からバリエーション主義なのだ。縦走であり、渓谷遡行であり、冬季登山であった。

ウェストンらが日本アルプスと名付けるのは勝手だが、えらく見下げられたネーミングだと思う。（日本ヒマラヤに改名しようか）飛騨山脈という立派な名前があるのだから、昔から使われている山地名を使ってきてほしかった。日本アルプスをアルプスに模して、アルピニズムを追及してきたのだから、どこかに無理があるのだろう。そして、黎明期の登山家の山旅が終わったころに谷川岳の岩壁登攀が始まった。そこらあたりから、西欧風バリエーション主義の模倣が始まった。

この風潮は長く続いた。今もその延長にあるのかもしれない。しかし、その内容の格差が縮まったかというと少し心もとない。一九六五年、ワルター・ボナッティがマッターホルン北壁を冬季単独新ルート登攀した同じ年の夏に、やっと日本人初の北壁が芳野満彦らによって登られた。この頃から社会人山岳会を中心として、アルプス詣でが盛んになった。そのための訓練として、小さな日本の崖岩壁に網の目のようなルートが拓かれ、その小ささをカバーするため、冬季継続登攀という方法も編み出した。

これらはもっとも日本的なバリエーション・ルートだと思うし、不安定な気象条件の下では、西欧にもない厳しい登攀がなされてきたかもしれない。日本の山の岩や氷は小さいが、先人たちはアルピニズムのバリエーション主義の意味を十分に理解していた。日本の冬壁からアルプスの岩壁を経て、ヒマラヤに雄飛した社会人クライマーの活躍は、日本登山史の輝かしい一ページを飾っている。

目覚める意思

時代が白い闇に踏み出したとき
忘れられたものたちが目を覚ます
行くのだ　ヒマラヤの高みへ
雲の逝くところへおもむく者こそ
静寂を友とする者こそ　おまえは目指す
おおいなる風景は　なべて孤独でできている
真昼の宙に星をすまわせ
凍りつく嵐　立ちはだかる障壁
吹雪が消し去った神々の足あとこそ
・・・・おまえは目指す
投げ入れるのだ　その意思の全重量を
風雪に導かれ　おまえの望む世界の縁で
おまえの登攀は旋律になる

安楽椅子でまどろむ人は見るだろう
愚か者が　白い闇の階段を恐る恐る上るのを
そして知る　それが無垢な道であることを
途切れなく来ては去る　命を見つめながら
おまえは　ありったけを山にゆだねる
目覚める意思は　新たな地平のまえに立ち
生きるに値する　この世界を切り拓く

３、スポーツアルピニズムの台頭

スポーツとは運動である。語源は肉体を介して動き運ぶこととあるから正しい翻訳だ。妄想スポーツというものはない。スポーツはすべて肉体で表現される。その拡大解釈の中に競技性が現れてきて、突き詰めると、人と人との比較（優勝劣敗）まで発展する。活動する場所が屋内であろうが、整備されたグラウンドであろうが、大自然の中であろうが、スポーツマンの関心は場にあるのではなく、公平性が担保された活動（競技）そのものにある。スポーツには潜在的に競うべき他者が不可欠だ。だから、探検登山や放浪（旅）はスポーツではない。

では、現代アルピニズムはスポーツか。アルピニズムの対象は岩と氷の世界である。アルピニストの目的は、大自然との対話が基調になっている。他者を意識しないとまでは言わないが、それはなくてもかまわない。垂直の散歩といった登山家がいたが、死を賭した遊技は本来競技とはなじまない。公平性が担保されないからである。しかし、現実はスポーツの競技性に取り込まれていく。一般的に人間は、オリジナリティよりコンペディションを好む傾向が強いし、孤立より同調を好むからだ。

かつて、黎明期の登山家たち、有閑文人たちが探検の気分で分け入った山は、大学山岳部の参加によって変質していった。京都大学が代表する科学的探検登山と早稲田大学が代表するスポーツアルピニズムである。否、変質と言うべきではない。西欧に生まれた近代アルピニズムを日本風に解釈して進化させたと言えるだろう。

探検登山（初登頂主義）がスポーツでないのは当然だが、バリエーション主義にはスポーツ的側面が現れてくる。それは暗黙のルールや自己規制が働くからである。山に対して人間側に共有する価値観が生まれて、それがお互いの行動を規定し、評価しあう。他者の目が必要なのだ。分かりやすく言うと、他者に驚かれたい、褒められたいのだ。

私は、アルピニズムは極限的自然環境における、舞踏的パフォーマンスではないかと思っている。スポーツより芸術に近い。そこに旅の要素が加わる。絶頂はそのフィナーレであり、一つの舞台が完成する。そして新たな自己表現を模索する。私はアルピニズムにそういう世界を望んでいる。

しかし現実は、そこにとどまらず、さらに進化（退化？）した。バリエーション主義はスポーツクライミングと冒険パフォーマンスに分化して発展した。分かりやすく言うと、フリークライミングから派生した人工壁クライミング競技と興行メディアをスポンサーにした演劇的アルピニスト（見せる冒険）の登場だ。共にプロ化して、スポンサー契約して職業として成り立つようになった。

スポーツクライミングに不可欠で重要なことは、数値表現である。比べるための基準、グレードの整備が必要で、それらは数値で表される。難度であり、所要時間である。それらは厳密に定義される。競技クライミングではない冒険登山でも数字は幅を利かし始める。登山内容そのものより数値に世間の関心が集まる。八八四八ｍという世界最高峰の数値、八千ｍ一四座全山、六大陸最高峰、日本百名山、最高年齢、最短登山日数（登攀時間）、これらはすべて、山の個性を取り上げているのではなく、人間側の数

値目標にフォーカスしている。

大衆やメディアがこの数値に惹かれるのは理解できる。分かりやすいからである。アルピニズムや探検の本質を理解するには、かなり複雑な予備知識がいるので、正しい評価を下すのはむつかしい。ヒマラヤに行ってきたと言うと、エベレスト登ってきたのと聞く大衆に、説明することもめんどくさい。だから数値で安易に納得させる。

スポーツクライミングはますます自然と離れていき、限りなく体操に近い競技スポーツになっていく。フリークライミングの登場はそれに拍車をかけた。ヨセミテに代表されるビッグウォールは岩と氷を分け、無雪期の岩壁登攀とバーティカルアイスのアクロバット的な氷瀑登攀に分化した。そのおかげで、クライミング技術が飛躍的に伸びたが、それは必然的に登攀技術の優劣を競う方にますます傾いていく。山（全体）から岩（部分）へそのフィールドは限定的になり、肉体表現の志向は、ボルダリングから室内ボードクライミングへ発展していった。

陸上競技に例えれば、キングオブスポーツと言われた十種競技より、百メートル走やマラソンが注目されることと似ている。肉体的能力の優劣は特化した競技の方が分かりやすいからである。スポーツクライミングは、優劣を見せつけることを楽しんでいくようになる。もう登山ではない、山に登っていないのだから。明確に独立した体操の一分野であるから、アルピニズムの対象でないことはあきらかであるが、そのフィジカルな技術は、大いにアルピニズムに貢献している。しかし、その精神にはかなり隔たりがある。

動的登山（激しい冒険的アルピニズム）が歳とともに静観的登山（旅としての山岳逍遥）に回帰していったように、オリンピック競技クライマー（肉体的躍動）も歳とともに、ヨセミテへそしてパタゴニアのクライミング（精神的高揚）に発展していって欲しいのだが、多分そういう風にはならないだろう。

私の根底には、人と人とが肉体的優劣を競うことより、自然のダイナミックスに感動することの方が優位だと思っているところがある。クライミングは、最終的には大自然の中に戻っていって欲しい。家（人間社会）を飛び出し、見知らぬ土地（原始の自然）で己が肉体を躍動させて欲しいのである。アルピニズムは、山岳自然をフィールドとした行為なのだから。

Ⅲ、風土に根ざした登山

日本におけるアルピニズムの変遷を長々と述べてきた。しかし、結論はいたってシンプルである。アルピニズムという言葉が連想させた世界は、日本にとってはほかの分野と同様に、西洋文明への憧れと受容の過程に他ならない。舶来の衣食住に完全に取り込まれ、否、文化、価値観、美意識まで影響を受けてきた。ましてや昨今のグローバリズムは、インターネットと交通網の急激な発達で、もはや洋の東西を問うなどという視点は、時代錯誤であることは言をまたない。

しかし、こと登山について、私には何か座りの悪い感情が湧いてくる。それはどこから来るのだろう。それは多分、私の日常を支えているあたりまえの風土環境とそれに反応する私の五感のためである。

登山と一言で言っても、その行動や対象の違いで言葉も中身も随分違ってくる。Climbing（登攀）、Mountaineering（登山）、Trekking（山麓歩き）、Wandering（放浪）、Hiking（物見遊山）と分けると、アルピニズムは登攀の世界のみを対象にしている。ヨーロッパ・アルプスは岩と氷の世界だから、ClimbingとMountaineeringの間がきれいに線引

きできるが、私の登山はこれらのジャンルが混ざり合って行われてきた。日本の自然は森と水の世界、ソフトでやさしいからだろう。私たちは自然と戦わない、自然に包まれる生き方をしてきた。

一般的な登山のクラブ（社会人山岳会や大学山岳部）は、オールラウンドな活動をよく口にする。日本の山岳風土を四季折々に楽しもうとすると、無雪期の沢登りやロッククライミングから積雪期の氷瀑登攀やスキー登山まで多様な登山活動をすることになる。これらをひっくるめて、私たちは登山と思っているから、どこにでもアルピニズムが顔を出すし、簡単に物見遊山に転向する。そして、山岳雑誌にはこれらが等しく登場する。これはすばらしい文化風土だと思う。

アルピニズムのジャンルではないが、日本発祥だと思われる沢登りは、風土の特徴をよく活かした登山だと思う。それにアルピニズムの精神が合体して、渓谷登攀と言えるジャンルが確立した。滝を直登したり、ゴルジュを突破したり、ロッククライミングの技術は不可欠である。そこに旅の要素が加わるのだからすばらしい。

私の山岳部現役時代（一九七〇年ごろ）は冬山登山をメインに据え、夏山縦走や岩登りはそのための訓練的な色合いが強かった。長期（二週間）の雪中露営は、そのままヒマラヤに通じる生活技術でもあった。重い荷物を担ぎ上げた積雪期の岩壁登攀もヒマラヤに通じていた。技術的難度の高い短期速攻的なクライミングよりも、腰を落ち着けた長期継続登攀の方に力を入れた。とにかく学業をほっといて、年間入山日数を誇る風潮があった。西欧にはない日本独自の山岳自然との付き合い方ではなかろうか。

ゴールデンウイーク、夏山、正月冬山、三月春山、一〜三週間の合宿をした。岩登りあり、沢登りあり、縦走あり、スキー登山ありで、クライミングから山旅までのすべての登山形式を盛り込んだ。これら多様な登り方をさせてくれたのは、日本の山岳風土のおかげだ。西欧アルピニズムにあこがれながら、足元の自然との折り合いをどうつけるか、先人たちは工夫を重ねてきた。「Ⅰ、和製アルピニズムの発生」の章で述べた先駆者たちの考え方や行動の中に、それらが刻み込まれている。

私はそれをマイナーコンプレックスとは思っていない。いろいろ問題はあるとは思うが、近代化に遅れた極東の小国がまがりなりにも先進国の一角を占め、世界をリードしうる経済大国になったことと軌を一にしていると思う。十分に登山先進国の資格がある。

少々手前味噌にはなるが、私が登山人生の大半を費やした（それほど長い期間ではなかったが）厳冬期の剱岳と雪の黒部横断山行は、決してヨーロッパ・アルプスで行われたような登山形式ではない。だからと言って、これが新しいバリエーションなどという気はない。単に山岳風土が従っただけのこと、アルピニズムの呪文「より高き、より困難、より遠き」を身近な山で追及しただけのことだ。西欧アルピニズムのコピーではない、まさに風土に根ざした登山であったと自負している。

鹿島部落（九五〇m）から登り始め、鹿島槍ヶ岳（二八九〇m）を越え、黒部川十字峡（九〇〇m）を横切り、黒部別山（二三五三m）を経由して、剱沢（一六五〇m）から再び剱岳（二九九八m）に登り、馬場島（七〇〇m）へ下る、この横断山行の登攀高度差の合計は約四七〇〇mである。水平距離は言うに及ばず、酸素問題を別にすれば、ヒマラヤ登山の規模より大きい山を登っていることになる。その上にひどい悪天候ととんでもない豪雪だ。こじんまりとした自然には違いないが、アルプスやヒマラヤに劣らない手ごたえのある登山ができたと信じて

いる。「人を酔わしむるだけの園芸的美」ではない世界を演出したとも言えるのである。

実は世界にもこれと似たような感性で山に向かった登山家たちがいた。初登頂主義とバリエーション主義と風土的登山が混然となった、すばらしい探検登山やクライミングがあった。ヒマラヤ探検の大御所シプトンやティルマンは、未踏峰だらけのヒマラヤに背を向けて嵐の大地パタゴニア氷床を探検した。カンチェンジュンガ初登頂したジョー・ブラウンはギアナ高地のロライマを初登攀した。アンナプルナⅡを初登頂したクリス・ボニントンはパイネ中央岩塔を初登攀した。一九五〇から六〇年代にかけて、ヒマラヤの高峰が初登頂されているさなかに、多くの西欧の登山家たちはパタゴニアを目指した。山岳地の最高はヒマラヤにあることは異論のないところだろう。しかし、登山家たちはより未知で困難な山を探した。そこにはその地域独自の風土が大きな役割を果たした。嵐の大地パタゴニアやジャングルに隠された岩峰や極北の岩壁に惹かれていったのはそういうことだろう。

いみじくも現代の先鋭的なクライマーたちの活躍する山域と重なる。もう初登頂主義もバリエーション主義も無関係なように思える。アルピニズムの定義を超えて、自由な発想でそれぞれの登山を追及している。ウオルガンフ・ギューリッヒがフリークライミングから競技クライミングに移り、そしてトランゴ・ネームレスタワーをフリークライムしたように、フリークライマーがマカルー北西壁を登る日が来ることを期待している。

付録

私の語れる風土論的アルピニズムの変遷はこの辺りまでである。実践を離れ、メディアからもたらされる情報に依存し始めると、その本当の姿は分かりにくくなってくる。漏れ聞くに、昨今の日本人クライマーの活躍はすばらしいものがある。六、七千m峰の岩壁新ルートをアルパインスタイルで次々登っているのを聞けば、ワクワクしてくる。数は多いとは言えないが、西欧のアルピニストと肩を並べられるまでになったと言えるだろう。しかしその反面、登山愛好家大衆は日本百名山やエベレストトレッキングに代表されるように、（否、エベレスト登山そのものも）観光化の一途をたどるようになった。山岳会の高齢化と若者の山離れは決定的で、登山人口は増えているらしいが、アルピニズム志向はほぼ消えかかっていると言えるのではなかろうか。大学山岳部のほとんどは廃業状態だと聞く。

半面、人工壁スポーツクライミングの世界は大変な人気だ。オリンピック競技になるくらいだから、その底辺を支える愛好家人口はすごく多いのだろう。手軽な運動、上達の喜び、いかにもアーバンライフという感じがする。もう自然のかけらもなく、つまり命の危険のない健全なスポーツである。アルピニズムからのコメントは不要だろう。

もう一つの懸念がある。プロガイドのことである。ヨーロッパ・アルプスのアルピニストたちの生活を支えたのは、プロガイドの仕事があったことである。アルプス黄金時代も日本の黎明期の登山も、登山家は皆裕福な有閑人や文人、学者が多かった。仕事をしている者は、時間がかかり危険で金にならない登山はできない。それを可能にしたのはプロガイドという職業がありえたからだ。

日本はこの点でも、ガイド協会の設立が遅かったし、ガイドの内容もかなり異なる。かつて登山技術は山岳会やクラブで教えられるもので、登山学校で学ぶものではなかった。日本の山でガイドが必要な客とは、つまり完全な素人か老人である。山岳会の低迷とガイドの隆盛は軌を一にする。アルピニズム

が廃れ、登山の大衆化が始まって初めてガイド業が成立したと考えていいのではなかろうか。このあたりは、私にも確かなことは分からないが。

このことに連動して、プロの登山家が現れたことも注目すべきである。収入の得かたはいろいろあるだろう。ガイド、講演、著作、ドキュメンタリー映像、登山道具メーカーや販売店とのスポンサー契約、これらを成り立たすために大切なことは、ガイド個人の知名度を上げることである。それを後押ししたのがマスメディア、特にテレビである。今はＳＮＳに代表されるインターネットが威力を発揮している。これはアルピニズムをゆがめる可能性がある。

独自の登山観を持ち、自分の登山を貫いている数少ないスーパークライマーはいる。私たちはそれを羨望のまなざしで見ている。彼らはアルピニズムの牽引車だ。彼らのようなクライムが廃れたときはアルピニズムの終焉だ。すばらしい登山を実践し続けてほしい。

しかし、今の私の懸念は、それらが映像メデイアと結びついたときだ。登山の実況中継がされる時代、明らかに見せるパフォーマンスになっている。これは非常に危険だ。第一に登山に集中しにくくなる。第二に他者からの強制力が暗黙裡に働く。第三に撮影の労力を強いられる。第四に目立つことを要請される。第五によりエスカレートさせられる。そういうことに振り回されないようにしなければならない。

私は、一九八四年の冬季マッキンレー単独登山で行方不明となった植村直巳の遭難について疑問を持っている。ホークランド紛争で南極大陸横断の計画が頓挫した後で、この登山は決行された。極地圏犬橇冒険旅行が中心的な活動だった彼が、なぜ登山に復帰したのか。それが疑問だ。冬季マッキンレーは決してやさしい登山ではない。

後に高所登山のプロであった山田昇も同じ運命をたどったが、山田の計画には疑問を持たない。何故なら、彼にとって冬のマッキンレーは、より困難な登山を目指していると言えるからだ。しかし、植村にはそういう意思や必要が感じられない。実際、山から長い間遠ざかっていたのだから、計画の必然性がないように感じる。不自然なのだ。かなりの費用を投入したであろう南極計画の中止とマッキンレー登山のあいだに、何らかの影響力が働いていたのではないかと想像している。

同じようなことが、エベレスト南西壁で遭難した栗城史多にも感じられる。彼のエベレストに集中した登山の軌跡には、アルピニズムの整合性がない。目指している方向性が見えない。明らかに背伸びをしている。何のためにあのような登山をしたのだろう。彼の登山技術や体力の稚拙さを言っているのではない。山に何を求めているのかが分からないのだ。人を相手にしてあくせく登っているように見える。エベレストに群がる人々、冒険の商品化（見世物化)、発達したメディア、ヒマラヤ登山大衆化の犠牲者と見えないこともない。

登山は静寂を基本とする。アルピニズムは誰もが分かる簡単な世界ではない。アルピニストの心は大衆と共有できる世界ではないと思う。共有できると思う幻想の中に危険が潜んでいる。人の群がるところにアルピニズムの真の快楽はない、これは断言できる。どうぞ、本物の山と出会ってほしい。そろそろエベレストを卒業しよう、登山者もメディアも。

最後に私のアルピニズム理解を繰り返そう。アルピニズムは自然との対話であって、人との競争ではない。厳しく困難であればあるほど、孤独であればあるほど、日常生活では隠れていた自分があぶりだされる。自然に一人対峙するとき、欺瞞や策を弄することは必ず自分に返ってきて、ひどい目に合う。

いかなる人も自然の前では生きることに素直にな

る。素直になるしか方法がないからだ。つかの間であっても、あらゆるしがらみを絶つことの喜びと不安が交錯するところで、人はしみじみ生きていることを実感する。

冠の言葉の通りに、人を相手にあくせく登るのではなく、どうぞ自然を相手に登ってほしい。アルピニズムは、そのときとところを教えてくれる、すばらしい世界なのだから。

最後に『登山研修９号』に書いた言葉で締めくくろう。「アルピニズムの神髄－より困難を目指して－とは、高さ－不快な低酸素に耐え、遠さ－不便な生活を厭わず、岩壁－不安な日々を過ごしながら、時季－不利な季節を選んで、結果－不満の中で遭難死する行為である、と言える。アルピニストは不を好む不可解な奇人である」